

「自己肯定できる居場所を」

2017年08月14日

社会的犯罪の発生件数は減少傾向にあるそうで、喜ばしいことである。犯罪の加害者は罪に応じて、償いの責任を負うことは当然である。犯罪には動機がある。相手に対する激しい憎しみをもち、止むに止まれぬ激情に駆られて犯罪に走る。松本清張の小説では、隠したい過去が暴かれるのを恐れ、殺害するという設定が多い。ところが、最近の犯罪者の中には「誰でもよいから、殺したかった」「死刑になりたくて、殺した」などと、被害者と加害者の間に関係が全くないケースがある。罪には償いが求められるが、ただ責めるだけでなく、犯罪に至った状況を正確に分析し、社会的な対応をする必要がある。それをしなければ、同種の犯罪は後を絶たないのではないのか。

1968年から69年に、永山則夫による連続射殺事件が起こった。盗んだピストルで4人を殺害する凶悪な事件であった。裁判において、永山の生育過程が明らかになった。貧しい家庭で生まれ、親から養育を放棄され、家族の愛情を知らずに成長し、学校教育も受けられず、読み書きも困難だった。将来に対する希望や、他者への思いやりを育むことができなかった。刑務所で猛勉強をし、手記『無知の涙』を著し、1983年には『木橋』で新日本文学賞を受賞した。彼の生い立ちから、社会への復讐心を抱き犯罪に至った経緯が理解され、同情が集まったことは事実である。しかし、責任を問われ、1997年に死刑になった。

ノンフィクション作家の田原牧氏が『人間の居場所』を上梓している。シリア難民、LGBT、暴力団、子ども食堂、刑務所などの実態をリポートしている。巨大な資本の流れが人々の暮らしを破壊し、はみ出された者たちは、居場所を失い、当て所なく放浪し、苦しむ現実が描き出されている。その中で、暴力団について、下記のように報告している。暴対法が施行されて四半世紀、確かに暴力団員は減った。2005年には86,300人いたが、2015年には46,990人までに減少した。しかし、田原氏は、暴力団員がいなくなることはない、組織は壊されても、アウトローは存在し、社会のモデルから外れる者はいつの世にも存在するからだと言う。警視庁の統計では、若者がヤクザになった動機の大半が差別と貧困である。全国暴力追放運動推進センターの調査では、2割が「自分のような者でも認めてくれる」という自己承認要求であったと分析している。子ども食堂運動は広がっている。テレビドラマのような壮絶な体験をしている子どもたちの実態を報告している。しかし、「一人でも世の中に信頼できる大人がいて、自分を受け止めてくれると分かると、それが自己肯定感になって、子どもは必ず元気になっていく」と希望を伝えている。田原氏は「ハンナ・アーレントは『ナチスの悪の凡庸さとは言葉と思考を拒むもの』と説いた。つまり、『悪の凡庸さ』は思考を育む居場所の喪失によって増幅されていく」、これが、今の日本の社会ではないかと問いかけている。

昨年、知的障害者施設「津久井やまゆり園」で、19人を刺殺し、26人に重軽傷を負わせた戦慄する事件が起こった。容疑者は知的障害者を抹殺することが社会のためになるとして殺害した。現在も、その考えを持ち続けていると報道されていた。彼は成果主義、効率主義に徹底的に洗脳されたのではないのか。彼の犯罪は断じて許されることではないが、強く、豊かで、美しいものを「よし」とする時代の価値観が生み出した犯罪と言えるのではないのか。そして、彼自身も望む場を得られず、ニヒルに突っ走ったのである。

加害者を生み出さないように、自己肯定できる居場所を互いに作り出していくことが、大人の責任であると、しきりに思う。